

口頭発表A②

徳島大学の新スキルラボ紹介①

—シミュレーション教育への発展を目指して—

寺嶋吉保・長宗雅美・福富美紀・射場智美・赤池雅史

(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部医療教育開発センター)

1. 背景

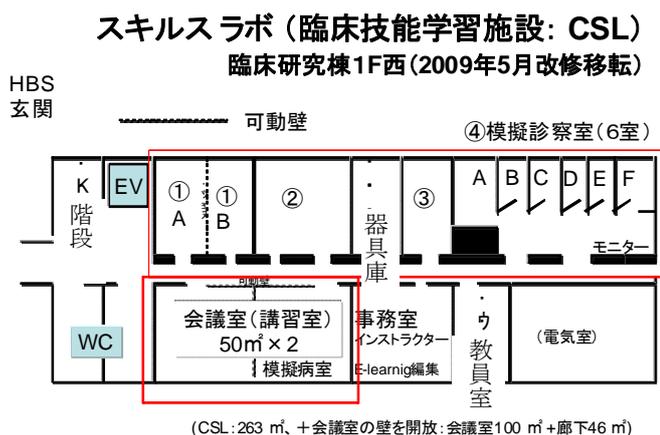
徳島大学の蔵本キャンパスには、医学・歯学・薬学・栄養学・保健学に跨がる医療系の3学部7学科、5大学院があり、酵素・ゲノムの各研究センターと附属病院を加え、**多職種にわたる医療人と研究者の養成を担う生命科学の一大教育・研究拠点**を形成している。2004年にはこれらを統合してヘルスバイオサイエンス研究部（HBS研究部）が設置され、組織横断的な教育支援のために医療教育開発センターが開設された。

医療の安全性に対する意識は年々高まっており、医療系学生がプロとしての実践力を身につけるために、その教育方法にも工夫が求められている。医療教育開発センターでは、教育支援の一つとして設置当初より、スキルラボの管理・運営を行ってきた。スキルラボは、模型型の医療人教育に関する物品を備えた学生の臨床技能学習施設である。その有効活用の為、2008年よりインストラクターを配置、2009年5月に改修移転し、現在は400㎡の新施設として稼働している。

これまでの利用状況を紹介しますと共に、今後の展望、特に現在の医療人教育で求められているシミュレーション教育の場としての活用と、その展望について紹介する。

2. 徳島大学スキルラボの要素

1) 新施設の完成



学習の場として、2009年5月、医学部臨床研究棟1Fに会議室（講習室）140㎡を含む400㎡の新施設が完成した。可動壁を使用し、状況に応じて部屋の広さを変更できる工夫や、壁面収納を用いた収納面積の確保など工夫を凝らした。

2) 物品の充実

医療教育開発センター設置当初より、総額6000万円になる模型・シミュレーターの購入とその管理等、物品の充実に努めてきた。

3) マンパワーの確保

2008年より専属のインストラクターを配置している。有効活用には、安定した人材確保が必須である。

4) 教育プログラムの工夫・充実。

定期的な講習会、シミュレーション教育の導入を実施している。

3. 利用状況

新施設の完成、専属のインストラクターの配置等を機に利用者の増加が認められた。

2009年度終了時には前年度を越す利用が予想される。利用者の内訳については75%が学内利用者であり、学外の利用も25%みられている。

徳島大学スキルラボ利用状況





4. シミュレーション教育とは

シミュレーション教育とは、実践を想定した教育・体験型学習である。実際の臨床現場・臨床場面を模擬的に再現した学習環境を提供し、学習者の疑似体験から、医療者としての知識・技術・態度の統合を目指す教育を意味する。

1) シミュレーション教育の利点

- ・学習者・患者を危険にさらさない。
- ・失敗が教材になる。
- ・学習のやり直し、中断が可能
- ・何度も繰り返し練習できる。
- ・学習時間が自由に設定できる。

等があげられる。また、学習者の設定を工夫することにより、チームワークやリーダーシップ、多職種間の連携教育を目指したコミュニケーションを学ぶことも可能である。

2) シミュレーション教育の課題

- ・シミュレーターやその管理にはコストとマンパワーが必要である。
- ・学習場所の確保に限界がある。
- ・学習者の人数に制限がある。
- ・シミュレーション教育に精通した指導者が必要である。

等、今後の発展に向けて改善すべき課題も多く認められる。

5. 今後の展望

「蔵本総合メディカル・ゾーン」構想により、2年後には徳島大学病院と新築完成予定の徳島県立中央病院がブリッジで繋がり、入院病床 1156 床の日本有数の医療環境が実現する。スキルスラボは、この「総合メディカル・ゾーン」の中核的な臨床技能学習施設として機能することが期待されている。

学生の実習はもとより、卒後研修、学外の医療従事者等、地域に開かれた臨床技能学習施設としての有効利用をめざし、医療人の生涯学習拠点として活動を展開する予定である。

地域に関わった臨床技能学習施設 (スキルス・ラボ)

他職種合同でホスピタリティとサイエンスの心を育むスキルス・ラボ

